

## 歩行するカップ

あらゆる事物が透明で  
およそ未知なるものは存在しないかのような錯覚とともに  
知りうる全ての情報が透き通って見える  
僕はそんな風景を前に  
プラットホームを流れる透き通った人間たちを眺めていた  
僕の意識はリズムを欲していた  
眺望なき世界に奥行きを与えるリズムを

可塑性を二度と取り戻すことのない  
安定的に加熱整形された感情が  
わずかな形態と色彩の差異を強調し  
大量に歩き回る  
それはまるで、プラスチックカップが  
各種の清涼飲料水を湛えて歩いているように見える  
その運動差分方程式を見出すのは極めて容易い

自己という液体を  
容器から溢れないように慎重に運び  
限定された振幅の中で揺れながら  
確率に支配されたリズムで歩行を強いられる  
想うという行為は極めて危険なものとされる  
なぜなら、よそ見でもしようものなら  
即座にその液体はこぼれ落ちてしまうであろうから...

さらに、もっとも危険な事態  
すなわち共振を避けるため  
我々は慎重に液体の素材を吟味しなければならない  
様々な衝突を、干渉を想定しなければならない  
あらゆるケースの流体挙動をシミュレートしなければならない  
そのような微妙な平衡状態へ向けて  
僕が投じうるどんなリズムがあるというのか

(2001.9.17)